

## TAKARABUNE 2024 漕ぎ出したアートのまつり

3月27日に始まり31日に会期を終えた宝船展(以下TAKARABUNE)、昨年からそれまでと大きく変わったことは、会期中に行われていたラウンドテーブルが、記録集の完成を待って、それを見ながら開催されるようになったことです。今年は6月9日、SMFフォーラム終了後、アート井戸端の時間と場所を借りて開催されたラウンドテーブルです。会場の浦和サポートセンターに集まったメンバーが18名そしてズームから参加した1名、合わせて19名の出席者で始まりました。展覧会開催に尽力された中村誠さんの司会進行で約1時間半、ラウンドテーブルが終わり、これで「漕ぎ出したアートのまつり」も幕が下ります。

TAKARABUNE報告の寄稿がご下命でしたが、展示の様子はSMFのホームページから記録集『TAKARABUNE 2024 漕ぎ出したアートのまつり』で楽しんでいただき、ここではラウンドテーブルを記録します。記録集が出来上がってからのラウンドテーブルなので(あたりまえですが)そこには掲載されていないからです。

以下、ラウンドテーブルでの一言を列記しました。出展者の場合、記録集に倣い二重山括弧内に作品名を、作品の掲載ページを括弧内に記してあります。また、発言者の敬称は省略し、要約の文責はすべて筆者にあるをご了承ください。

### ■イジマフヒト《ダイダラボッチ世界歩行プロジェクト番外編》(4頁)

昨年10月、さいたま国際芸術祭の市民プロジェクト「国際野外の表現展 秋ヶ瀬2023」でネットゾウしたダイダラボッチ足跡の指紋をこのアートのまつりに出展。50メートルの足跡を印せる敷地を募集。壁面でもOK。

### ■長田淳一[社会芸術/ユニットウルス]《野良の藝術 2023 大地の鼓動》(14頁)

「大地の風」「ゲル、シンポジウムYAMAMBA」「大地の狼煙・時空を超えて」「野良の藝術・現場展」の4本の柱をまとめるのに苦心、なんとかうまく収まった。もっと幅広くいろいろな人が垣根なく入って来られるような誘導が(自身の展示空間でも宝船展でも)今後の課題。

### ■菱田祐一郎(RECORD\_T49 NEO印象派プロジェクトアート)《32頁》

3回目の出展。毎回テーマを出せるだろうか緊張。長らく希望していた藤井香さんのダンスチームとのコラボが実現。アンケートで「ずっと見ていられる」との感想が4件。海とか空とか木々が光や風で動くのをずっと見ていられる、作品でも見る人に何か考えてもらえるようなところを目指して、嬉しいアンケートの反応だった。

### ■SYUTA《誰も来ない展覧会より》(16頁)

SMFの古株の一人。続けていくことが大事だと思いつつも毎年マンネリにならないようにと心掛けている。ここ数年は暗室での表現。今年も新し

い出合いやつながりがあった。隣に展示した菱田祐一郎さんと話をすると、デジタルとアナログでやり方が違って表現するテーマに共通のことがあることがわかり嬉しかった。

### ■中村隆《SMF Project Artworks 2008-2024》(26頁)

記録集の制作を担当、その協力に感謝。SMFプレスその他の記録も制作。今年は2008年から今年までのそれら制作物を展示、記録集の26~27ページを開けばいつ何をやったかが一目瞭然、SMFの記録であると同時に自分自身の記憶でもある。

### ■矢花俊樹《巨大昆虫巣くう一旅に誘う虫たち2024》(42頁)

自分自身はアートというよりは根っからの職人で、リアル感を追求、アーティストのような発想は出てこない。TAKARABUNEはアートプロジェクトの素のプランを発表する場でもあるので、アートの世界に飛び出したいという意味も含めて見せ方を工夫してみた。

### ■石崎幸治《錯視》(6頁)

今年で4回目の出展。いろいろな分野との出会いが楽しみ。いろいろな作品を観ることによって自分の立ち位置、作品の方向性がわかる。今年は錯視ということで、人間が見るということはどういうことかを問いかける作品、来年はまた違うものを考え新しい分野を開きたい。

### ■suzu《Dream up》(18頁)

「漕ぎ出した」というテーマなので、アートを描く痕跡をそのまま見てもいい、それがどのように見られるかという思いで制作。来場者から予想外の意見や感想を聞くことができた。デジタルでも絵を描いているのでその痕跡をその場で見られるようにQRコードに動画を載せていたが、電波が悪く残念だった。

### ■長谷川千賀子[社会芸術/ユニットウルス]《野良の藝術 2023 大地の鼓動》(14頁)

昨年初に開催した野良の藝術2023の集大成の報告展。始まりの頃、これからこんなことをと考えている夢を語り合い、ジョイントして夢を実現しようとした「さんなすび展(san nasubi exhibition)」(2013年)の発展形を考えてみたい。

### ■三浦清史(筆者です)

建築をやっている、アート畑ではないと言いつつも張っている。昔はラウンドテーブルに附随して展覧会の集約として行われていたアーティストトークだったが、昨年からは展示期間中毎日行うようになった。それが実に楽しい。しかしアーティストたちはみな語り巧者だ。

### ■加藤典子《生まれ変わる—be bone again》(8頁)

骨折し手術後の経過を追うレントゲン写真で現在の自分を表現。今回は他にも身体表現が多く(巨人の足の指紋、痣のアート、手のレントゲン写真からの3Dプリント、最大規模の人の形など)これも時代の流れか。近美地階の一般展示室は、暗

記録集15頁右下、柱に月が乗った木彫が自分の作品、四つのパーツで組まれている。

### ■吉田富久一[社会芸術/ユニットウルス]《野良の藝術 2023 大地の鼓動》(14頁)

三友(SYUTA)さんに次いで古株。TAKARABUNEでは野良の藝術の報告を展示。というのも、野良の藝術の始まる前年(2016年)SMFの活動の一環でTANBOプロジェクトがあり、推してもらってアートを求めていた見沼田圃で野焼きをし、それが母体となってファーム・インさき山での活動が現在まで続いているから。

### ■長野恒(会場レイアウト担当)(その成果は51頁)

昔は建築をやっていた空間をいじることに慣れている。それで会場レイアウトと展示計画を担当。アーティストの2次元3次元の表現の交通整理だが割合うまくいったと自負している。難問は暗所で空間的に広い。今年は三友さんの作品で救われたが、来年はもう少し工夫をこらしてみよう。

と、ここまで会場の円卓を一巡、最後はただ一人ズームで参加した田中清隆さん。

### ■田中清隆《影を集めて動き出せ》(20頁)

毎年同じようなことを何かちょっと変えながら制作し出展。何年前か前から思っていることは、出展者は自分を含めて常連が多くなり、それはそれでいいのだが、新しい空気を入れるために、次回はもっと新しい方への声かけをしていってもいいのではないかと思う。

今回の出展22作品中新規出展は3点。司会の中村誠さんはこのラウンドテーブルの中でただ一人の新規出展者イジマさんに感想を求めます。

### ■イジマフヒト

「漕ぎ出したアートのまつり」の言葉からなんとなくその趣旨は推察できるものの、展示はそれぞれの作家が作品を出展することになる。ではエントリーシートはその作品の紹介なのかそれとも未来を見据えた企画書とするのか分かりづらく、自分なりに提出はしたが、そこを明快に打ち出せられれば来場者にも分かりやすい展覧会になるのではないだろうか。

### ■中村元《甲辰祭》(24頁)

SMF発足当初から記録カメラマンとして活動。一人の展示スペースをこれほどもらえることは他に類を見ないTAKARABUNEの魅力。一点でも感じてもらう作品を作ろうとしているが、いくつかの作品を群として飾ったときに自分の作ったものの存在感、空気感を表現できたらと展示している。9歳の子供が離れ難く興味を持ってくれたことに感動。

### ■清水和乃[シミズフローラルデザインスクール]《時を辿って》(12頁)

今年スクール生徒各自の「心の残るもの」「言葉」「写真」などを組み合わせた立体作品を船のように繋げた陳列だが、昨年は天井からたくさんベットのボトルを吊るす表現で計画、近美一般展示室では想定外の天井からの作品展示で、中村誠さんの配慮と工夫に感謝。

### ■衛守和佳子[社会芸術/ユニットウルス]《野良の藝術 2023 大地の鼓動》(14頁)

野良の藝術のチームの一員として参加。今日の午前中はみんなで畑仕事をしていて駆けつけた。TAKARABUNEの会場では自由に楽しそうにコミュニケーションをとっているのが面白く感じた。



▲TAKARABUNE 2024ラウンドテーブル

貌するのですが、そのプロジェクトシートも実現年(Year of realization)の記入が省略され、展覧会のエントリーシートに様変わりし、企画書の要素が薄れてしまっていたかもしれません。それでもそれが未練として残っているので、外から見るとわかりづらくなっているかもしれません。

そこでTAKARABUNEの現状とこれからを中村誠さんから。

### ●中村誠(TAKARABUNE 2024の遂行と各種連絡を担当)

去年は「夢のかけらをくもにまく」今回が「漕ぎ出したアートのまつり」と望洋としたイメージタイトルを設け、どのようにも解釈ができるキーワードを投げかけるという意図でやっている。だから焦点が定まらないバラバラだという印象であることも事実。ぼーっとしたタイトルでやる部分とテーマをカッチと絞りぐつと詰まった作品を集めたコーナーを設けるのも一法。

出展予定者へのアンケートを行いテーマ設定についても聞いたことがあった。テーマを明確にすると出展者の自由度が失われるという意見が多く今の方法を続けているが、その時も展覧会を二部構成三部構成とし、望洋としたアンデパンダンの部門とテーマを深く絞りアーティストを選定した部門を設けてはどうかとの意見もあった。

展覧会を構成分ける前例はSMFにもあった。「あつとファクトリー」(2012年)では三部構成になっていた。手前の空間にヒアシンスハウスの会による立原道造に関する展示があり、奥の空間では立原道造の詩から受け取ったイメージを造形化するというテーマでグルグルハウスのメンバーが競作し、中央の空間には高砂小学校で行ったワークショップ「ひみつきちをつくろう」で作られた子どもたちの秘密基地を持ち込んで、SMFのメンバーと来場者が会期中にダンボールなどの素材で展示空間のスペースにつないで街並みにしてゆく。そして最終日のダンスユニット「転々」と段ボールを着た15人の子どもたちが踊りながら街を破壊して終わるといふ不思議なプログラムだった。このように全体を一つのトーンにしないでいくつかに分けた構成というのもありではないか。

今はアンデパンダン形式とし、手を挙げれば、誰でも参加できるスタイルを続けている。ただSMFの発表会ではないという基本は守っている。

プロジェクト案の展示から、みんなで面白いものを選びその実現にトライするのはどうかという話がでたときに、それでは賞選定と同じ流れになるとの懸念が多かった。それはそうだが、現状とはまた違う章立てとし特設コーナーを設け、より強いテーマによる展示空間やアーティスト招聘の舞台を作ることも検討課題としていいのではないか。

そして会場からも、  
▶特に(強いテーマは)設けないで、望洋としたテーマを自分なりに解釈して表現するのは独自性として面白い。それをもう一段階発展させるような、例えば、普通の展覧会ではそこに頂点を持って

くように制作するのだが、頂点をもっと先に置き、不可能と完成の中間のところを狙うと解釈の自由さが残せるのではないかと。

▶アーティストトークが面白いという発言があったが、初日の展示がそれによって最終日には変わってしまうというような作品やアーティストトークを何回もやることによって(作家自身によって)変えてゆくという展開はどうか。

と、まだまだアイデアが続きそうところでタイムアップ、以上が大雑把なラウンドテーブルのアーカイブです。物足りなく感じたのは、今年のTAKARABUNEで強く印象に残ったシーンがアーティストトークのところで見た「変化」で、まさにこれから「作品が変わる」ことへの論及が期待できそうだったからです。そこで記録集の「あとがき」と重複しますが、最後にその印象に残ったシーンを繰り返し記すことをお許しください。

はたみきさん《バースマーク≡ヘビとネコ Birthmark ≡ Snake and Cat》のアーティストトークのときでした。用意した原稿を読んでご自身の作品を紹介し終わったはたさんが、その6枚の原稿を展示した作品の傍らの壁に貼り、すると、それらがキャプションを超え新たな吹出しへと様変わりし、次に移ろうとした観衆の足を引き留めた。強く印象に残ったのはそんなシークエンスでした。

長野さんと僕達の分野、建築には技術の側面があり、技術なので目的を持ち依頼者がいます。目的はその時々で変わり、依頼者は気まぐれです。だからそれらの変化に応じられてこそ社会や依頼者によりそうことになり市民権が得られる、言い換えればみんなから役に立つと認められるようになるのです。ときどきアートが認知され普及するためにその役割が話題に上ります。しかし建築がそうだったように、もしかすると変化をどのように受容できるかということがその鍵になるのではないかと思います。

その変化は環境や受け手側からだけではなく作家自ら産み出すことができるものだと、あのアーティストトークから教えられる、ホワイトキューブの中では決して起こり得ない臨機応変が、ワークショップやパフォーマンスの一期一会で鍛えられてきたSMFだからこそその十八番になっていたことに気づきました。

これからは相対的な世界観の間から生じるさまざまな変化の類の波を、どのように漕ぎ分けて進むのか、それが船出したTAKARABUNEの課題になるのですが、次のTAKARABUNEではさらなるお家芸にとブラッシュアップされているに違いないと信じます。

そんな予感、折しも会期中に上の階で、いかにも応変にはほど遠そうなAbsoluteと冠した企画展が開催されていたからかもしれません。

三浦清史(建築家、SMF代表)

SMFは身近な場所でアートを享受し支援し再創造するプラットフォームをめざしています。

執筆：三浦清史

編集：SMF広報委員会 発行：Saitama Muse Forum

〒330-0073 埼玉県さいたま市浦和区元町2-28-18 こうだ設計事務所内

問い合わせ：SMF.info@artplatform.jp

http://www.artplatform.jp

https://www.facebook.com/Saitama.Muse.Forum/

SMF Saitama Muse Forum

SMF Saitama Muse Forum